

5章 大学生活における諸経験と卒業生の将来展望

1 はじめに

近年の大学の卒業式といえば、男性はスーツ、女性は振袖を着ての出席が一般的になっている。会場にはドレス姿の女性もおり、ごくまれに羽織袴の男性を見ることもある。晴れやかな姿で式に出席した卒業生たちは、学友との別れを惜しんだり、学生生活でやり遂げたことを振り返ったり、今となれば笑い話になるような数々の失敗を語り合ったりする中で、在学中のさまざまな思い出が頭によぎったはずである。中にはやり残したことの多さに、内心悔しい思いをした学生もいたかもしれない。

また卒業生たちは、過去の追想だけでなく、未来へのさまざまな展望を胸に抱いていただろう。晴れて社会人となることへの期待に胸を膨らませたり、在学中でできなかったことへの挑戦を決意したりと、さまざまな思いが交錯していたはずである。

本章の目的は、こうした卒業生たちが、大学を卒業する時点でどのような将来展望を抱いており、それが大学在学中のどのような経験と関係しているのかを考察することである。

分析に用いるのは、大学を卒業した後に関わっていきたい活動についてたずねた項目である。選択肢には「会社のために働く」「NPO・NGOなどの社会活動」「地域社会や地元への貢献」「趣味や娯楽のサークル活動」「選挙や政治運動の支援」「その他」の6つがあり、あてはまるものすべてを回答してもらう形になっている。

本章の構成としては、まずこれらの活動をどの程度の卒業生が希望しているのかを確認し、次に希望する活動の「幅」と「組み合わせ」の傾向を見ていく。さらに、卒業後に希望する活動がどのような要因と関連しているかを見るために、属性と大学での諸経験に焦点を当てた分析がなされる。最後に、大学生活全般の充実度と満足度が卒業後に希望する活動の選択とどのような関係にあるかを考察していく。

2 卒業後の希望活動

2.1 希望する活動の分布

表1は卒業後にやってみたいことをたずねた項目の回答分布を示したものである。

卒業後にやってみたいこととして、全体の約半分が会社のために働くことと趣味・娯楽のサークル活動を挙げており、地域社会や地元への貢献(35.2%)、NPO・NGOなどの社会活動(17.0%)がそれに続く。地域社会・地元への貢献とNPO・NGOなどの社会活動はどちらも社会貢献のための活動と考えられるが、これら2つの社会貢献活動のうち少な

くともどちらか一方に関わっていきたいと回答した人は、全体の 41.3%となっている¹。卒業後にやってみたいこととして選挙や政治運動の支援を挙げた人はごくわずかであり、「その他」を選択した回答者も比較的少ないことから、多くの卒業生が卒業後に希望する活動は、会社のために働くこと、趣味・娯楽のサークル活動、社会貢献活動の3つから選択されているといえる。

表 1 卒業後に希望する活動

	あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
会社のために働く	49.9	50.1	100.0 (357)
趣味や娯楽のサークル活動	50.6	49.4	100.0 (358)
地域社会や地元への貢献	35.2	64.8	100.0 (358)
NPO・NGOなどの社会活動	17.0	83.0	100.0 (358)
選挙や政治運動の支援	2.8	97.2	100.0 (358)
その他	8.1	91.9	100.0 (358)

2.2 希望する活動の「幅」と「組み合わせ」

前述したように、調査では表1に記載された諸活動のどれか1つを回答してもらうのではなく、卒業生たちが将来やってみたいことすべてを選択してもらっている。当然のことだが、卒業生の中には卒業後にやってみたい活動として何か1つだけを選択している人もいれば、いくつかの活動を選択している人もいる。また、同じ数だけ選択していても、その組み合わせは人によって異なっている。つまりこの質問からは、卒業後に希望する活動の「幅」と「組み合わせ」の傾向をとらえることができるのである。

表2は対象活動を「会社のために働く」、「趣味や娯楽のサークル活動」、「社会貢献活動」の3つにしぼって、全体としての選択の「幅」と「組み合わせ」の傾向を見たものである。

表 2 希望する活動の幅と組み合わせ

	パーセント(N)
会社のために働く	17.9 (64)
趣味・娯楽	11.5 (41)
社会貢献	12.6 (45)
会社のため+趣味・娯楽	16.2 (58)
会社のため+社会貢献	5.9 (21)
社会貢献+趣味・娯楽	12.9 (46)
社会貢献+社会貢献+趣味・娯楽	9.8 (35)
非選択	13.2 (47)
合計	100.0 (357)

¹ この値が「地域社会・地元への貢献」と「NPO・NGO等の社会活動」の割合の単純合計より少なくなっているのは、どちらも選択した回答者がいるためである。

まず表の「非選択」というところを見てほしい。これは3つの活動を選択しなかった人の属するカテゴリーで、全体の13.2%がこれに該当する²。言い換えれば、全体の約87%は「会社のために働く」「趣味や娯楽のサークル活動」「社会貢献活動」のうちから少なくともどれか1つを選択しているということになる。

次に、3つのうちから1つだけを選択した人の割合を見ると、「会社のために働く」が17.9%でもっとも多い。「趣味・娯楽」のみ、「社会貢献」のみの選択はともに12%前後で、「会社のために働く」だけを選択した人に比べると少ないことがわかる。

3つのうちから複数の活動を選択した人の割合をみると、「会社のため+趣味・娯楽」がもっとも多く、全体の16.2%がこれに当たる。「社会貢献+趣味・娯楽」は全体の12.9%である。

「会社のため+社会貢献」を選択した人の割合を見ると、やや興味深い結果となっている。この2つを選択した人は全体の5.9%で、8つの類型中もっとも該当者が少ないのである。2変数間の関連を見た表3～表5を見ると、会社のために働くことと趣味・娯楽のサークル活動、社会貢献活動と趣味・娯楽のサークル活動にはそれぞれ関連がないのに対して、社会貢献活動と会社のために働くことの間には関連があり、卒業後に社会貢献活動を希望している人ほど会社のために働くことを希望しておらず、逆に会社のために働くことを希望する人ほど社会貢献は希望していないことがわかる。

これには2つの要因が関わっていると思われる。

多くの人にとって、会社に勤めながら社会貢献活動に従事することには多くの物理的・精神的コストが必要とされる。卒業後に希望する活動として会社のために働くことと社会貢献活動の両方を選択する人が少ない原因の1つには、こうしたコストの問題が関わっているだろう。会社と社会貢献の両方を選択する人が少ないもう1つの原因として、価値の問題が考えられる。単に2つの活動の両立が難しいということだけでなく、両者が相反する価値によって支えられている可能性についても念頭に置くべきだろう。

表 3 社会貢献×会社のため

		社会貢献		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
会社のため	あてはまる	31.5	68.5	100.0 (178)
	あてはまらない	50.8	49.2	100.0 (179)
合計		41.2 (147)	58.8 (210)	100.0 (357)

p<0.01

² この中には「選挙や政治運動の支援」と「その他」のどちらか、あるいはその両方だけを選択した人と、どの活動も選択しなかった人が含まれている。

表 4 会社のため×趣味・娯楽

		会社のため		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (%)
趣味・娯楽	あてはまる	51.7	48.3	100.0 (80)
	あてはまらない	48.0	52.0	100.0 (77)
合計		49.9 (78)	50.1 (79)	100.0 (57)

n.s.

表 5 趣味・娯楽×社会貢献

		趣味・娯楽		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (%)
社会貢献	あてはまる	55.4	44.6	100.0 (48)
	あてはまらない	47.1	52.9	100.0 (71)
合計		50.6 (81)	49.4 (77)	100.0 (58)

n.s.

3 属性と卒業後の希望活動

これまでの分析から、多くの卒業生が卒業後に希望する活動として会社のために働くこと、趣味・娯楽のサークル活動、社会貢献活動の3つのどれかを選択していること、そして、社会貢献活動を選択した人はそうでない人と比べ、会社のために働くことを選択していないことが明らかになった。

では、こうした大学生の卒業後の希望活動は、どのような要因と関連しているのだろうか。ここからは、中心的な卒業後希望活動である3つの活動（会社のために働くこと、趣味・娯楽のサークル活動、社会貢献活動）と他の変数との関連を見ていくことにする。まず、卒業後に希望する活動と属性との関係について見ていこう。

表6～表8は、将来やってみたい活動と性別の関係を見たものである。

ここから、性別は3つの卒業後希望活動のいずれとも関連がないことがわかる。会社のために働くことと趣味・娯楽のサークル活動を選択するのは男女とも50%ほどで、社会貢献活動は40%ほどである。興味深いのは、会社のために働くことを希望する割合に男女の差が見られない点である。結婚や妊娠、その他さまざまな理由により、今後実際に会社のために働き続ける女性の割合は男性に比べれば少なくなると考えられる。しかし大学卒業の時点においては、男性と同じく女性の約半分が会社のために働くことを希望している。

実家の経済状態も性別と同様、3つの卒業後希望活動との間に関連が見られなかった(表9～表11)。

表 6 会社のため×性別

	会社のため		
	あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
男性	51.3	48.7	100.0 (152)
女性	49.8	50.2	100.0 (201)
合計 (N)	50.4 (178)	49.6 (175)	100.0 (353)

n.s.

表 7 趣味・娯楽×性別

	趣味・娯楽		
	あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
男性	51.3	48.7	100.0 (152)
女性	50.0	50.0	100.0 (202)
合計 (N)	50.6 (179)	49.4 (175)	100.0 (354)

n.s.

表 8 社会貢献×性別

	社会貢献		
	あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
男性	43.4	56.6	100.0 (152)
女性	40.1	59.9	100.0 (202)
合計 (N)	41.5 (147)	58.5 (207)	100.0 (354)

n.s.

表 9 会社のため×実家の経済状態

	会社のため		
	あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
豊か～やや豊か	49.7	50.3	100.0 (163)
ふつう～貧しい	50.3	49.7	100.0 (191)
合計 (N)	50.0 (177)	50.0 (177)	100.0 (354)

n.s.

表 10 趣味・娯楽×実家の経済状態

	趣味・娯楽			合計 (N)
	あてはまる	あてはまらない		
豊か～やや豊か	48.8	51.2	100.0	(64)
ふつう～貧しい	51.3	48.7	100.0	(91)
合計 (N)	50.1 (78)	49.9 (77)	100.0	(155)

n.s.

表 11 社会貢献×実家の経済状態

	社会貢献			合計 (N)
	あてはまる	あてはまらない		
豊か～やや豊か	39.6	60.4	100.0	(64)
ふつう～貧しい	42.4	57.6	100.0	(91)
合計 (N)	41.1 (46)	58.9 (209)	100.0	(155)

n.s.

4 在学中の諸活動経験と卒業後の希望活動

4.1 学業成績

これまでの分析から、性別と実家の経済状態という2つの属性変数と卒業後に希望する活動との間に関連がないことが明らかになった。そこでここからは、大学在学中の学習への取り組みやさまざまな活動の経験が、どのように卒業後の希望活動と関連しているのかを見ていこう。

表12～表14は、卒業後に希望する活動と大学における学業成績の関連を見たものである³。

³ 大学での学業成績について、調査ではGPAが6段階でたずねられている(1.49未満、1.50～1.99、2.00～2.49、2.50～2.99、3.00～3.49、3.50以上)。分析ではこれをもとに、サンプルがおおよそ3等分されるようにグループ化したものを用いた。

表 12 会社のため×大学成績

		会社のため		
		あてはまる	あてはまらない	合計
大学成績3段階	上	47.3	52.7	100.0 (93)
	中	48.5	51.5	100.0 (103)
	下	54.2	45.8	100.0 (142)
合計		50.6 (71)	49.4 (67)	100.0 (38)

n.s.

表 13 趣味・娯楽×大学成績

		趣味・娯楽		
		あてはまる	あてはまらない	合計
大学成績3段階	上	43.6	56.4	100.0 (94)
	中	54.4	45.6	100.0 (103)
	下	52.8	47.2	100.0 (142)
合計		50.7 (72)	49.3 (67)	100.0 (39)

n.s.

表 14 社会貢献×大学成績

		社会貢献		
		あてはまる	あてはまらない	合計
大学成績3段階	上	51.1	48.9	100.0 (94)
	中	47.6	52.4	100.0 (103)
	下	33.8	66.2	100.0 (142)
合計		42.8 (45)	57.2 (94)	100.0 (39)

p<0.05

表 12 および表 13 から、卒業後に会社のために働くこと、趣味・娯楽のサークル活動を希望するかどうかと、大学での学業成績とは関連がないことがわかる。しかし表 14 を見ると、大学での学業成績は、卒業後に社会貢献活動を希望するかどうかと関連があり、大学での学業成績が良い人ほど、社会貢献活動を希望していることがわかる。学業に対する取り組みの積極性が、卒業後の社会貢献活動への意欲とプラスに関連しているのである。ただ表 15 からわかるように、学業への取り組みといっても、高校 3 年生の時点での成績は大学卒業後の希望活動として社会貢献活動を選択するかどうかと関連がない⁴。これらの結果は、社会貢献活動への意欲に対して大学教育が効果をもつことを示唆している。今回の分析からこのような因果関係を断定することはできないが、大学教育と学生たちの卒業

⁴ 調査では高校 3 年生のころの成績について 5 段階でたずねられている（上のほう、中の上、中ぐらい、中の下、下の方）。大学の場合と同様、分析ではこの項目を 3 段階に加工したものを使用している。

後の将来展望の関係を考える上では、興味深い結果であるといえる。

表 15 社会貢献×高校成績

		社会貢献		
		あてはまる	あてはまらない	合計
高校成績3段階	上	42.9	57.1	100.0 (7)
	中	40.2	59.8	100.0 (84)
	下	42.4	57.6	100.0 (2)
合計		41.4 (46)	58.6 (207)	100.0 (353)

n.s.

4.2 サークル活動

次に、大学における学業以外の活動経験と卒業後に希望する活動との関係を見ていこう。

表 16～表 18 は、在学中におけるサークル活動の頻度と卒業後の希望活動の関係を見たものである。

表 16 会社のため×サークル活動の頻度

		会社のため		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
サークル活動	よくした・ときどきした	52.7	47.3	100.0 (201)
	あまりしなかった・しなかった	45.6	54.4	100.0 (47)
合計 (N)		49.7 (73)	50.3 (75)	100.0 (148)

n.s.

表 17 趣味・サークル活動の頻度

		趣味・娯楽		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
サークル活動	よくした・ときどきした	57.9	42.1	100.0 (202)
	あまりしなかった・しなかった	42.2	57.8	100.0 (47)
合計 (N)		51.3 (79)	48.7 (70)	100.0 (149)

p<0.01

表 18 社会貢献×サークル活動の頻度

		社会貢献		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
サークル活動	よくした・ときどきした	46.5	53.5	100.0 (202)
	あまりしなかった・しなかった	36.1	63.9	100.0 (47)
合計 (N)		42.1 (47)	57.9 (202)	100.0 (249)

p<0.1

表 17 より、在学中サークル活動を頻繁にしていた人の方が、卒業後も趣味や娯楽のサークル活動に従事することを希望しているのが見て取れる。しかしそれだけでなく、表 18 からは、サークル活動を頻繁にしていた人の方が卒業後に社会貢献活動を希望していることがわかる。

サークルの中には社会貢献活動に近い活動を日ごろから行っているサークルも存在すると思われるが、スポーツや文化活動など、社会貢献とは直接的な関わりのない活動を行うものがほとんどである。それにもかかわらず、サークル活動に励むことと卒業後希望活動として社会貢献を選択することにこのようなプラスの関連が見出された点は、興味深い結果である。

4.3 ボランティア活動

表 19～表 21 は、在学中にしたボランティア活動の経験と卒業後の希望活動の関係を見たものである。

表 21 からは、ボランティア活動に関わるが多かった人ほど、卒業後の希望活動に社会貢献活動を挙げる割合が高いことが読み取れる。ボランティア活動をよくした、あるいはときどきした人のうち 63.4%が、卒業後も社会貢献活動に関わっていきたいと考えている。卒業後に希望する活動として社会貢献活動を挙げた人が全体の約 40%ほどであった点を考えれば、在学中のボランティア経験と卒業後の社会貢献意欲との関連の強さがうかがわれる。

また表 19 を見ると、ボランティア経験のある人に社会貢献活動を希望する割合が高いだけでなく、会社のために働くことを希望する割合が低いことがわかる。こうした結果は、在学中におけるボランティア活動の経験が、「会社のためよりも社会のために」という生き方の選択へと結びつく可能性を示唆している。

表 19 会社のため×ボランティア活動

		会社のため		
		あてはまる	あてはまらない	合計
ボランティア活動	よくした・ときどきした	42.0	58.0	100.0 (31)
	あまりしなかった	53.7	46.3	100.0 (82)
	しなかった	54.0	46.0	100.0 (39)
合計		49.4 (74)	50.6 (78)	100.0 (52)

p<0.1

表 20 趣味・娯楽×ボランティア活動

		趣味・娯楽		
		あてはまる	あてはまらない	合計
ボランティア活動	よくした・ときどきした	51.1	48.9	100.0 (31)
	あまりしなかった	54.2	45.8	100.0 (83)
	しなかった	47.5	52.5	100.0 (39)
合計		50.4 (78)	49.6 (75)	100.0 (53)

n.s.

表 21 社会貢献×ボランティア活動

		社会貢献		
		あてはまる	あてはまらない	合計
ボランティア活動	よくした・ときどきした	63.4	36.6	100.0 (31)
	あまりしなかった	30.1	69.9	100.0 (83)
	しなかった	28.1	71.9	100.0 (39)
合計		41.6 (47)	58.4 (206)	100.0 (53)

p<0.01

5 大学生生活の充実度・満足度と卒業後の希望活動

最後に大学生生活の充実度・満足度と卒業後の希望活動との関係を見ていこう。

表 22～表 24 は大学生生活の充実度と卒業後の希望活動の関係を見たものである。各表右側の合計を見るとわかるように、大学生生活が「充実していた」という回答がもっとも多く、「どちらかといえば充実していた」がそれに続く。「どちらともいえない」「どちらかといえば充実していなかった」「充実していなかった」と回答した人は非常に少なくなっており、全体としての充実度の高さが読み取れる。

表 24 を見ると、卒業後の希望活動として社会貢献活動を選択するかどうかと大学生生活

の充実度の間には関連があり、大学生活が「充実していた」と回答した人よりも、「どちらかといえば充実していた」と回答した人の方が卒業後社会貢献活動に携わりたいと考えていることがわかる。大学生生活満足度との関連を見た表 27 でも結果は同様に、大学生活に満足している人よりも、どちらかといえば満足している人の方が卒業後に社会貢献活動を希望する割合が高い。

これらの結果から、大学での生活が充実し、それに満足できた人よりも、一定の充実感と満足感を持ちながらも、まだ向上の余地があったと自覚している人の方が、社会貢献への意欲が強いことがわかる。さらに、このような関連があるのは社会貢献活動の場合だけで、他の2つの活動にはこうした関連が見られない(表 22・表 23・表 25・表 26)。充実度・満足度ともに分布が偏っているため結論を急ぐことはできないが、大学生活に若干の悔いや未練を残した人が、会社のためでも自らの趣味のためでもなく、社会への貢献を志向する傾向があるとすれば、興味深い結果であるといえよう。

表 22 会社のため×大学生活充実度

		会社のため		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
大学生生活充実度	充実していた	51.5	48.5	100.0 (241)
	どちらかといえば充実していた	48.4	51.6	100.0 (93)
	どちらともいえない～充実していなかった	41.2	58.8	100.0 (17)
合計 (N)		50.1 (76)	49.9 (75)	100.0 (351)

n.s.

表 23 趣味・娯楽×大学生活充実度

		趣味・娯楽		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
大学生生活充実度	充実していた	52.7	47.3	100.0 (241)
	どちらかといえば充実していた	48.9	51.1	100.0 (94)
	どちらともいえない～充実していなかった	29.4	70.6	100.0 (17)
合計 (N)		50.6 (78)	49.4 (74)	100.0 (352)

n.s.

表 24 社会貢献×大学生活充実度

		社会貢献		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
大学生生活充実度	充実していた	39.8	60.2	100 (41)
	どちらかといえば充実していた	50.0	50.0	100 (4)
	どちらともいえない～充実していなかった	17.6	82.4	100 (7)
合計 (N)		41.5 (46)	58.5 (206)	100 (352)

p<0.05

表 25 大学生生活満足度×会社のため

		会社のため		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
大学生生活満足度	満足	49.6	50.4	100.0 (36)
	どちらかといえば満足	51.5	48.5	100.0 (9)
	どちらともいえない～不満	42.9	57.1	100.0 (1)
合計 (N)		49.7 (77)	50.3 (79)	100.0 (356)

n.s.

表 26 大学生生活満足度×趣味・娯楽

		趣味 娯楽		
		あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
大学生生活満足度	満足	50.8	49.2	100.0 (36)
	どちらかといえば満足	54.0	46.0	100.0 (00)
	どちらともいえない～不満	33.3	66.7	100.0 (1)
合計 (N)		50.7 (81)	49.3 (76)	100.0 (357)

n.s.

表 27 大学生生活満足度×社会貢献

	社会貢献		
	あてはまる	あてはまらない	合計 (N)
大学生生活満足度 満足	38.6	61.4	100.0 (236)
どちらかといえば満足	51.0	49.0	100.0 (100)
どちらともいえない～ 不満	28.6	71.4	100.0 (21)
合計 (N)	41.5 (48)	58.5 (209)	100.0 (357)

p<0.1

6 おわりに

今回の分析で明らかになったのは以下の点である。

- ①全体の9割近くの卒業生は、卒業後に希望する活動を、会社のために働くこと、趣味や娯楽のサークル活動、社会貢献活動（地域社会・地元への貢献、NPO・NGOなどの社会活動）の3つから選択している。
- ②卒業後に希望する活動として会社のために働くことを選択した人は、社会貢献活動を選択しにくい。
- ③会社のために働くこと、趣味・娯楽のサークル活動をする事、社会貢献活動をする事この3つを卒業後に希望するかどうかは、性別や実家の経済状態とは関係がない。
- ④これらの活動を卒業後にやってみたいと思うかどうかは、大学における学業への取り組み、サークル活動、ボランティア活動の経験と関連している。学業成績が良い人ほど卒業後社会貢献活動に従事したいと考えており、大学でサークル活動を経験した人の方が卒業後も趣味・娯楽のサークル活動に従事したいと考えている。また、サークル活動の経験は、卒業後における社会貢献活動への意欲とも関連しており、サークル経験のある人の方が社会貢献活動への意欲も強い。ボランティア活動を行っていた学生は社会貢献活動を希望する割合が高いだけでなく、会社のために働くことを希望する割合が低い。
- ⑤大学生生活の充実度・満足度がもっとも高いグループよりも、やや高いグループにおいて、卒業後に社会貢献活動を希望する割合が高い。

本章では、大学での学業への取り組みや学業以外のさまざまな経験が卒業後に希望する活動と関連することを見てきた。しかし、なぜこうした関連が生じるのかという問題についてはほとんど触れることができなかった。こうした問題にアプローチするためには、大学生活やそこでの経験が、学生たちにとってどのような意味をもち、それがどのような価値観や人生観を育み、ひいては学生たちの将来へとつながっていくのかを考えていかなければならないだろう。学生数の減少と大学間の競争が著しい中、大学がどのようなサービスを提供し、そこで学生たちがどのような能力を身に付けるかという視点は、今後一層重

要になると思われる。しかしそれだけでなく、学生にとって大学生活やそこでの経験がどのような意味をもっているのかということについて地道に考えていく作業も、欠かすことはできないだろう。本章でなされたのは、こうした作業に向かうための下準備にすぎない。今後より発展的な研究していくことが課題となるだろう。

(5章担当：猿渡壮、教育G Pアカデミックアドバイザー、博士前期課程)